

City Life NEWS

全国で注目される施策や課題は、地域で暮らす私たちにどう影響するのか?身近に起きた出来事やトレンドなど、幅広い分野のニュースを紹介していきます。ネットでもさまざまなニュースを紹介しています。



シティライフNEWS で検索

西宮市・尼崎市・豊中市・吹田市が連携する「NATS」誕生

吹田市が2020年4月に中核市へと移行し、同時に全国でも初めて4つの中核市(ほか西宮市・尼崎市・豊中市)が隣り合うことになる。今回の移行を機に、吹田市は大阪府からの権限移譲を進め、市民サービスの向上を図ると共に、4市が府県の枠組みを越えて連携する新たな「都市間ネットワーク」[NATS(ナッツ)]の形成を目指す。

中核市とは、政令で指定する人口20万人以上の市で、事務権限を強化し住民の身近なところで行政を行うことができるようにした都市制度。吹田市は、多様化・複雑化する市民ニーズや超高齢社会の課題に柔軟に対応できるまちづくりのため、中核市移行を目指してきた。

主な市民サービスへの効果は①地域の保健衛生の推進②行政サービスの効率化・迅速化③特色あるまちづくりの推進の

大きく3つ。中でも特に①に関して変化が大きいという。これまで市の保健衛生を担う機関は、健康相談や保健指導などを目的として保健師や看護師、栄養士などが配置される「保健センター」だった。そこに中核市などに設置される「保健所」が加わる。保健所には医師や獣医師、薬剤師などの専門家が新たに配置され、これら専門家の判断が必要な食中毒や感染症の恐れがあった場合、今後は市で一括して対応できるので、迅速な対応が可能となる。

今回、新たな取り組みとして注目されているのが、西宮市・尼崎市・豊中市・吹田市が連携する「NATS」だ。それぞれが「関西住みたいまちランキング」で上位に位置するまちであり、交通の利便性が良いという立地を生かした連携などが考えられる。その第一歩となるのが2020年1月のキックオフミーティング「NATS 0(ナッツゼロ)」。

ミーティングが本当のスタートです。行政の話だけではなく、市民の皆さんが身近に思ってもらえるような、文化・芸術やスポーツの繋がりも今後あるかもしれません。ぜひ関心を持っていただければ」と担当者話している。

中核市連携シンポジウム「NATS 0」(ナッツゼロ)

2020年1月25日 大阪学院大学2号館(吹田市岸部南2) 9時45分~12時 入場無料・申し込み不要
問い合わせ先
吹田市中核市移行準備室 06-6155-5782



2020年東京パラリンピックを目指すエアライフル選手 片山友子さん

4.5ミリの弾で10メートル先にある約5センチの的の中心を撃ちぬく競技・エアライフル。茨木市在住の片山友子さんは、同競技で2020年東京パラリンピックを目指す。

片山さんは骨がもろく折れやすい先天性の疾患「骨形成不全症」で、中学生の頃に骨折して以来、車いす生活を余儀なくされた。射撃との出会いは大学生の時。「激しいスポーツができない身体なので、それまで自分がスポーツをするなんて考えられませんでした。私にもできるか

なと思いました」と振り返る。まずは競技用の光線銃を使う「ビームライフル」からスタート。2、3年もすると頭角を現し、全国大会で優勝するまでになった。次第に「もっと上を目指したい、と欲が出てきました」とパラリンピックの種目にあるエアライフルへの挑戦を決意。子育てが一段落した30代前半から本格的に練習を始めた。片山さんの種目は下肢に障害がある人のクラスの「10mエアライフル伏射」。車いすに取り付けたテーブルに肘をつき、座った状態で打つ。集中力は

さることながら、平常心を保つ精神力も必要だ。片山さんの強さの秘密は「周囲の人の励まし」という。「マイナス思考に陥ると、どんどん点が取れなくなってしまうのですが、他の選手たちが『そんな時もあるよ』など声をかけてくれて、気持ちを切り替えられるようになりました」。

仕事の合間の練習で少しずつ結果が残せるようになり、2年前にはアスリート採用で別会社に転職し練習に集中できる環境も整った。昨年は逃した全日本強化選手にも今年には選出された。現在は週5日

「自分の活動を通じて、もっとライフルのことをたくさんの人に知ってもらえたらいいと思います」と話す片山さん。

程度を練習に費やし、府内外を飛び回る日々だ。

現在は1月のマスターズ大会、そしてパラリンピック選考のラストチャンスとなる5月の国際大会に向けて調整中だ。「私はここまで来るのに、本当に人に恵まれてきました。その人たちに少しでもいい報告がしたいですね」。



大会に臨む片山さん。10メートル先の的に神経を集中させる。



City Life NEWS CULTURE - SPECIAL INTERVIEW

20歳の監督が撮った 映画「真言アイロニー」 尼崎で完成披露試写会を開催

神戸市にある真言宗御室派梵天山「宝珠寺」の第十七世住職：平井尊士(ひらいたかし・そんし)氏が急逝したのは2017年12月23日のこと。父親の仕事の関係で平井氏と懇意にしていた石原ひなたさん(当時19歳)はADHD(注意欠陥・多動性障がい)で生き方に悩むなか、平井氏と過ごした短い時間の中で『自分らしい生き方』『生かされている意義』を見出し始めていた。

「中学生の頃、父が仕事で結婚式の映像撮影を頼まれた際、サービスで写真撮影をしたのだけれど、お前が撮っている

か?と父に言われたのがこの仕事を始めるきっかけでした」とひなたさん。撮った写真を見て、新郎新婦が感動してくれたことで、初めて人に認めてもらう喜びを経験したと言う。「そうやって、父の仕事を手伝う中で、平井さんと出会いました。僧侶であり、大学の教授でもあった人ですが、いつも豪放磊落(らいらく)で、僕のADHDの特性にも困っていた様子はなかったです」。

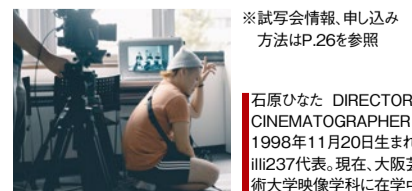
生前、平井氏は「ひなたくんが写真や映像の仕事で大きな賞を取ったら、おいしいステーキの店に連れて行ってあげる」とよく言っていたそう。「それは賞が大事なんじゃない

なくて、賞をとって、いろんな人からの信頼を得て仕事ができるような環境を作りなさい、ということだったと思います」とひなたさん。

映画では、平井さんを中心にそれぞれの人のドラマが描かれている。「ストーリーは、配役のほとんどすべてにモデルとなる人物が存在する【ファクション】(faction)の群像劇になっています。この映画を作りたいと思った動機は、平井さんを二度死なせない(彼の生きた記憶を人々の脳裏から風化させない)という思いからでした」とひなた

さん。映画製作のための多額の費用も自身で各方面に出向き、集めたという。

オフィシャルサイトでは、180秒の予告映像を見ることができる。北摂や阪神間の見慣れた風景が、ひなたさんの感性で物語の舞台となり、登場人物の想いが伝わってくる。全編を見たくなる作品だ。



※試写会情報、申し込み方法はP.26を参照

石原ひなた DIRECTOR/CINEMATOGRAPHER
1998年11月20日生まれ。iii1237代表。現在、大阪芸術大学映像学科に在学中。